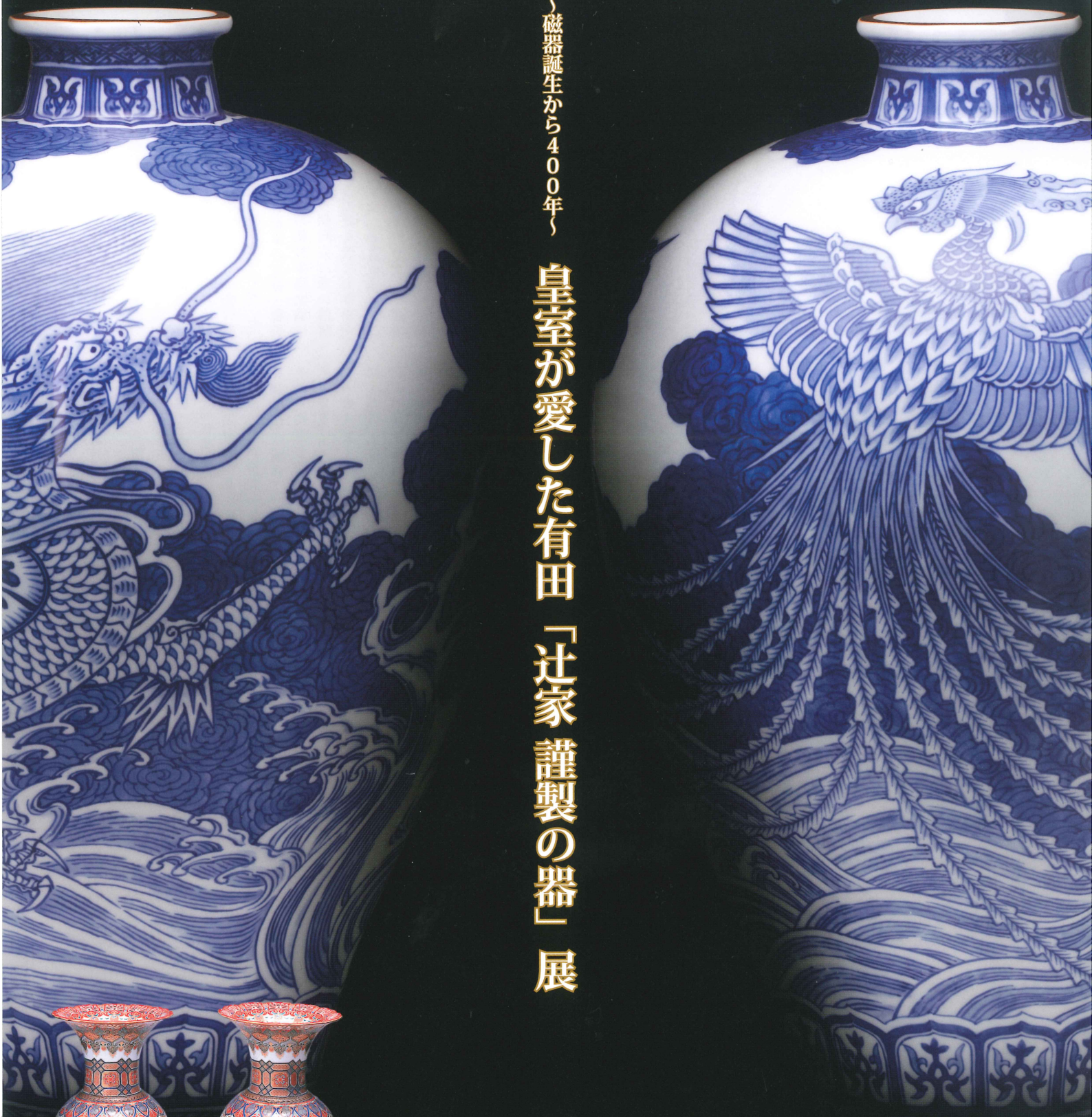


磁器誕生から400年

# 皇室が愛した有田「辻家謹製の器」展



フィラデルフィア万国博覧会 金牌受賞作品  
「極金彩菊唐草文透かし大花瓶」 高さ73.5cm 径25.5cm

会期：2014年5月22日(木)～25日(日)

10:00～18:00 (最終日は17:00閉場)

場所：アクロス福岡 2階 交流ギャラリー (入場無料)

## イベント

【記念講演】 5月22日(木)14時～15時「謹製の器展」会場内  
佐賀県立九州陶磁文化館 館長 鈴田由紀夫氏

## 「有田焼 400年の歴史と辻家の名陶を語る」

5月24日(土)・25日(日) 両日とも14時～14時30分

「辻家秘伝の極真焼」の披露と当主 十五代 辻常陸による解説

# 陶都有田 磁器発祥より 400 年



※辻家門（トンバイ塀）

佐賀県有田町はわが国で初めて磁器が製造された発祥の地として知られている。その有田で磁器が誕生する以前、豊臣秀吉の命により全国の諸大名率いる軍勢が朝鮮半島に侵攻するという事件があった。いわゆる十六世紀末の文禄・慶長の役である。この朝鮮半島全域に及ぶ戦争は、日朝両方に深い傷跡を残して秀吉の死を機にようやく終結する。別名「やきもの戦争」と呼ばれたこの事件において、戦地に赴いた諸大名の多くは、焼物の高い製造技術をもつ韓人の陶工達を日本に同行した。佐賀鍋島藩祖直茂公も陶工・李参平らを領内に同行した。そしてかれらの功績により元和二（一六一六）年に有田の泉山にて白磁鉾が発見され、上白川天狗谷で初めて焼かれたのが磁器であり、これが有田焼の歴史の始まりである。二年後二〇一六年はこれより四〇〇年の節目を迎える。

「有田焼誕生四〇〇年」

「禁裏御用窯 名門辻家」

有田焼の歴史の中に辻家が登場するのは、今から三百数十年も前の寛文四（一六六四）年のことである。「辻家時代書」によると、初代市右衛門を陶祖とする辻家は三代喜右衛門まで精緻華麗をもつて知られる鍋島焼の藩御用窯の職にあり、その三代喜右衛門の時にはじめて名声をあげている。

中島浩氣氏の『肥前陶磁史考』によれば、人皇百十一代靈元天皇は、殊の外嘉納あらせられ給ひ、之れより佐賀藩主鍋島光茂へ御下命ありて、喜右衛門へ「禁裏御用御膳器一切其他御雛形を以て尚一層清浄潔白なる製品を調達すべし」との勅諭あり」と記され、こうして辻家有田焼の歴史の表舞台へ現れるのである。

この「禁裏」とは、みだりにその中に入ることを禁じるという意味であり、「宮中、御所、禁中、内裏」を表し、たとえ徳川將軍家といえども勝手に入ることが許されなかった聖域のことである。これが現在まで続く皇室と辻家の関係の始まりであり、この時から御所常用の御器は鮮麗な「青花」に染付（藍色の模様を染め付けた磁器製品）になったと言われている。



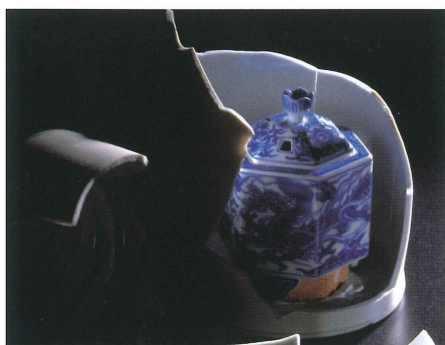
※江戸期「御料器」

## 皇室が愛した有田「辻家 謹製の器」展

「極真焼（ごくしんやき）」

文化八年（一八一二）に九代辻常陸（喜平次）により発明された辻家独自の焼成製法です。製品と同質の磁土で匣鉢「さや」を作り、蓋との接触部分と内部全面に製品の釉薬より低火度の釉薬施し、その中に製品を納め焼成します。製品の釉が融けるより前に匣鉢の内側の釉が融け密閉状態ができ、内外のガスが浸透・拡散を完全に遮断し、その結果玉のような気品あふれる肌の光沢の製品が得られます。

焼成後、鉄槌で匣鉢を破碎して製品を取り出します。従って匣鉢の使用は一度限りで多くの手数を要するものですが、当時は現代に比べ焼成技術が遅れている中で、一層素晴らしい作品を皇室に献上するために、創り出された技法であり、永久保存の宮内庁資料にも記録されています。



※辻家秘伝の極真焼



※江戸期献上品「染錦龍型水注」



※平成2年 即位の大礼「天杯」



※明治期 日本初の洋食器

### 1部 皇室が愛した有田

- ・江戸期よりの禁裏御用品（菊花御紋章入皿など）
  - ・皇室ゆかりの品（献上品・晩餐会用食器など）
  - ・明治期万国博覧会の出品作
- ※特別出品 1876年米フィラデルフィア万博金牌賞作品  
（極金彩菊唐草文透かし大花瓶一対）香蘭社辻製

### 2部 現代に生まれた名品の数々

- ・400年の伝統と技術により生まれた現代の逸品を展示
- ・1811年、皇室の為に発明された辻家秘伝の焼成法「極真焼」により作品展示